

(2)1939年の変化

1939（昭和14）年に入るとにわかに変化が生じる。『青春ノート』には「マルキシズム」（1939年1月）と題した文で、マルクス主義者の転向を問題にした。続いて「戦争と文学に就いて」「続戦争と文学に就いて」（ともに1939年1月）が記される。このふたつを草稿として『向陵時報』に藤澤正（ふじさわただし）の筆名で「戦争と文学とに関する断想」（『向陵時報』1939年2月1日、「著作集8」と「自選集1」に収録）を公表する。加藤自身が「著作集」に収録するときに書いた「追記」にいうように、この文章は必ずしも反戦の文章ではない。しかし、戦争は文化を破壊するものであるからこそ、戦争は文化を考え直す機会になるのだ、というはなはだ逆説的な主張をもった文章で、婉曲に反戦を主張したのだった。

1939年以降の「ノート」に綴られる文章には、ふたつの主題が特徴的に表れてくる。ひとつは「戦争」であり、もうひとつが「インテリ＝知識人」である。戦争のさなかに、知識人の果たす役割について考えはじめていたことを意味する。この問題意識が戦後になって「戦争と知識人」（『近代日本思想史講座4』筑摩書房、1959年）を書かせることにつながるのである。

1939年は、高等学校最後の3か月と浪人生活を余儀なくされた日々である。翌年の入学試験に備えなければならなかった年に、加藤は戦争の動向に注意を払い、インテリの役割に思いを馳せ、ノートに綴りつづけた。それは加藤の時代に対する危機意識の表れだろう。